

# PROFILE

## 柚崎 通介

慶應義塾大学医学部生理学講座



平成15年4月1日に金子章道先生の後任として、当講座を担当することになりました。暫くは前任地の米国セントジュード小児研究病院と兼任して、日米間を往復していましたが、平成16年1月に遂に米国の研究室を畳んできました。慶應の生理学教室は加藤元一先生以来、歴代の先生方が素晴らしい業績を挙げて来られた教室であり、この伝統を汚すことなく、そして更に発展させて行くべく、精一杯頑張りたいと思います。

私と生理学との出会いは、医学部学生時代に当時の生理学教室に居られた小澤静司助教授（現・群馬大学教授）のもとで電気生理学の実験を手伝わせていただいたことにあります。丁度、ハミルらのパッチクランプ法の論文が出たばかりであり、この論文を頼りにアンプ、プラー、マイクロフォーシ、更には解析ソフトなどを手探りで作成したのは今ではとても懐かしい思い出です。このように学生時代は電気生理学にどっぷりと浸かっていたのですが、卒業時にはもう少し臨床医学の経験を積んでから進路を考えたいと思い、また生意気ながら、電気生理学で理解できる脳の機能にも限界を感じつつありました。結局、4年間の臨床経験の後に、香川靖雄生化学教授（現・女子栄養大学副学長）を頼って自治医科大学大学院に入学し、また当時基礎生物学研究所に居られた御子柴克彦教授の下で分子生物学を教えてくださいました。しかし、大学院終了後は、むしろ生理学の重要性に目覚め、生理学をもう一度きっちりと勉強するために、当時神経棘レベルでのCaイメージングで脚光を浴びていたJohn A. Connorの研究室に留学しました。そして、ノックアウトマウスを作っている研究室とたまたま共同研究することになり、マウス遺伝学的な手法も取り入れるよ

うになりました。このような次第で、私の研究の方法としては、電気生理学を中心として、臨床医学、分子生物学、マウス遺伝学などを行ったり来たりしましたが、興味の中心は常に記憶・精神現象のメカニズムを理解したい、という一点にあります。

私は大学院までは日本で教育を受けたのですが、ポスドク以来、この10年半ほどは米国で研究生生活を送ってきました。米国では、異分子としての自分を意識することが多かったのですが、久しぶりに帰国すると、今度は日本でも異分子としての自分を意識することが多いのに驚きます。特に、研究費や会計の制度については色々な問題点を感じます。恐らく多くの問題は既に先人たちによっても指摘されてきたと思います。それでも大きく変化して来なかったのは何故なのでしょう。新参者のくせに、とは思いつつも、成熟してきた社会を発展させてきたのは、往々にして社会的に異分子の人たちであることが多い、という歴史的事実を心の支えとして、こういった問題にも何れ取り組んでいきたいと思っています。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

### 略歴

|       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 1985年 | 自治医科大学医学部卒業                    |
| 1993年 | 同大学院にて博士号取得                    |
| 1993年 | ロッシュ分子生物学研究所<br>(HFSP博士研究員)    |
| 1995年 | セントジュード小児研究病院・<br>発達神経生物学教室助教授 |
| 2002年 | 同准教授                           |
| 2003年 | 現職                             |